

# ユニバーサルデザイン化された支援内容の系統性についての探究 — 幼稚園における支援内容と小中学校における支援内容との縦断的関連（2） —

佐々木全\*, 池田泰子\*\*

下山恵・千葉紅子・高橋文子・渡邊奈穂子・小野章江・北條早織・川村真紀\*\*\*

\*岩手大学大学院教育学研究科, \*\*岩手大学教育学部, \*\*\*岩手大学教育学部附属幼稚園

(平成30年3月2日受理)

## 1. はじめに

本学部の附属学校特別支援教育推進専門委員会では、平成22～27年度、附属4校園と教育学部の協働事業としてユニバーサルデザイン授業の普及推進に取り組んだ<sup>1) 2)</sup>。この成果の一端は「ユニバーサルデザイン授業実践事例集」と「ユニバーサルデザイン授業実践事例集・増補版」として公刊された<sup>3) 4)</sup>。これらは、附属4校園に岩手県内の公立小中高等学校における実践事例を加え集積したものであり、現在までに広く活用されている。なお、この表紙を図1に示した。

### (1) ユニバーサルデザイン授業の定義と理念

ユニバーサルデザイン授業とは、どの子どもも、わかる・できる授業をめざすものであり<sup>5) 6) 7)</sup>、教師の努力目標を端的に表現したスローガンでもある。これには、当然ながら通常学級に在籍する特別な支援を有する児童生徒の適応、包摂の理念がある。

近年では、全国各地で教師の自助、互助活動が盛んになっている。その象徴的かつ実際的な出来事として、日本授業UD学会の設立があった。そのホームページには、次のような説明があり、ユニバーサルデザイン授業の志向及び研究分野としての位置づけが宣言されている<sup>8)</sup>。

日本授業UD学会は、本来、授業で追究していた「わかる・できる」授業づくりを再考するとともに、特別支援教育の考え方を生かすことで、クラス全員の子どもたちが、楽しく「わかる・できる」授業をつくることを目指す学会です。日本初の教科教育と特別支援教育コラボレーション研究です。

また、日本授業UD学会の支部・部会として、全国各地18団体のホームページへのリンクが張られている。また、2016年以来、年次の全国大会を3回開催している。

このような、実践と研究が活気づく状況にあって、多様な子どもの姿を前提とした多彩なアイデアがユニバーサルデザイン化された支援内容として具現化され、また一層期待されている。それゆえに、ユニバーサルデザイン授業の定義は、必要十分条件というよりも十分条件によってのみ定義されている。換言すれば、「傘概念」として多彩なアイデアを包摂している。このイメージを図2に示した。このことで、特定の形式や手法に限定し、他を排除するという事態あるいは発想を予防しているものと見受けられる。



図1 ユニバーサルデザイン授業実践事例集

## (2) 幼児教育とユニバーサルデザイン

幼児教育において、教師は「幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない」<sup>9)</sup>。つまり、環境を通して行う教育こそが幼稚園における教育方法の基本である。また、発育発達上の個人差が顕著であり、発達障害等の症状との峻別がしにくい時期にあつて、幼稚園教育では、より広汎な状態像の幼児を想定し、どの子どもも、わかることを得ることをめざすことになる。つまりは、「保育の基本はユニバーサルデザイン」なのである<sup>10)</sup>。

なお、幼稚園における「わかる・できる」とは、幼児期に育みたい資質能力として挙げられる「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」<sup>11)</sup>への接近に他ならない。

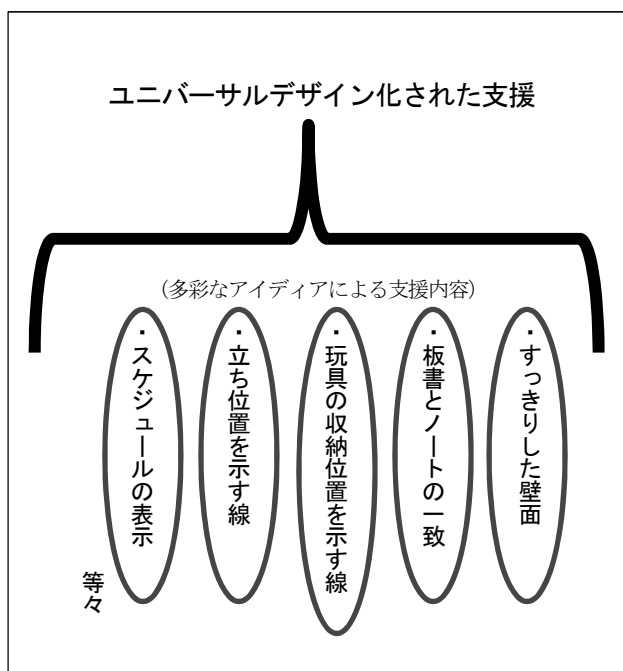


図2 ユニバーサルデザインの傘概念

## (3) 切れ目のない支援とユニバーサルデザイン

「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて(報告)」では、幼児教育において育みたい資質・能力の整理をした上で、小学校の各教科等との接続のあり方について、その必要性を指摘している。具体的には、小学校の各教科等にお

いて生活科を中心としたスタートカリキュラムの中で、合科的・関連的な指導や短時間での学習などを含む授業時間や指導の工夫、環境構成等の工夫を行うなどのことである<sup>12)</sup>。

ここでは、幼稚園における支援内容に関する情報が小学校においても共有・活用されることの有用性が想定される。そのレパートリーの一つとして、ユニバーサルデザイン化された支援内容や方法に関する情報提供があれば、幼児に対する小学校での適応の一助となるだろう。

このことは、特別支援学校における学校や学部間の接続において個別の教育支援計画や個別の指導計画が接続におけるツールとして活用されること、またそこでは支援内容が取扱われることに相通ずるものである。また、このような考え方は、ライフステージごとの支援内容の連続性・継続性を重視する「切れ目のない支援」<sup>13)</sup>にも通ずる。

## (4) 本研究の目的と着眼点

本研究では、幼稚園において実施されているユニバーサルデザイン化された支援内容が、小中学校において実施されているユニバーサルデザイン化された支援内容との間にどのような関連があり、どのような系統性が想定されるかについて、その仮説を提起することを目的とした。

この端緒として実施した前年度研究では、授業参観によって収集した実践事例をもとに、附属幼稚園と附属小中学校における実践内容について、3つの系統性があることを仮説として見出した<sup>14)</sup>。すなわち、①教育内容に即した系統性である。幼稚園においては、生活内容が扱われ、小中学校では教科内容が扱われる。各々の内容中における系統性であるのではないか。

②実施主体に即した系統性である。ユニバーサルデザイン化された支援内容の実施主体は教師であるが、内容によっては、子ども自身がそれらを内在化し自らあるいは互助的に活用することがある。つまり実施主体の交代や移行における系統性であるのではないか。

③認知発達段階に即した系統性である。ユニバーサルデザイン化された支援内容の系統性は、認知発

達段階に即した整理ができるのではないかと。ユニバーサルデザイン化された支援内容においては、視覚情報を活用するなどの認知的な側面に着目した実践例が少なからずある。そこには、視覚情報への感受性、理解度など、認知発達段階に即した系統性があるのではないかと。

以上を踏まえつつ、本研究では「③認知発達段階に即した系統性」に着眼し、そのレパートリーとなる事例を収集する。特に視覚情報と対比的に語られることの多い聴覚情報の活用事例を収集する。実は、冒頭に紹介したユニバーサルデザイン授業の実践事例として紹介される内容の多くは、視覚情報の活用によるものである。この一例として附属幼稚園での実践事例を図3～図4に示した<sup>16)</sup>。前者は、玩具の収納位置の表示である。後者は、歌詞のイメージを伝えるための紙芝居の活用である。視覚に訴える手立ては、物質化されるために記録や紹介しやすい性質があることも一因であろう<sup>注)</sup>。

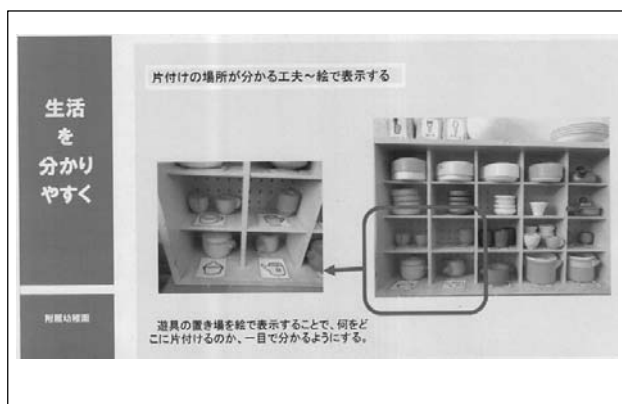


図3 視覚情報によるユニバーサルデザインの実践例①

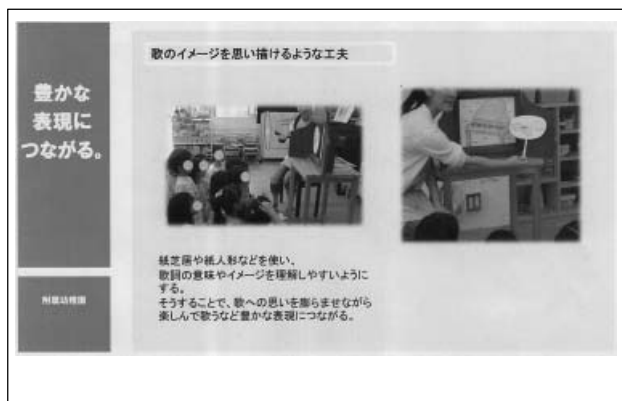


図4 視覚情報によるユニバーサルデザインの実践例②

## 2. 方法

附属幼稚園と附属小中学校において実施されているユニバーサルデザイン化された支援内容の事例について次の資料から探究、把握する。すなわち、①ユニバーサルデザイン授業実践事例集、②授業参観記録、③当該授業の学習指導案、④当該授業の動画記録、⑤当該授業者に対する聴取記録、⑥教師による研究保育における協議である。

その上で、本稿では支援事例を取り上げ、それを基に考察する。支援事例は、エピソードとして記述する。保育研究会等の幼稚園教員による取組においては、子どものエピソードについて提供し合い教師間で多角的な解釈をもって、環境構成や援助方法が検討されることが多い。本稿においては、エピソード記述及びその活用の方途<sup>16)</sup>を踏まえつつ、幼児教育の現場における方法を採用した。

支援事例は、幼稚園におけるユニバーサルデザイン化された支援内容に基づき、小中学校における類似事例を対照させ、それらの実施の意図や形態等に類似性を把握した。これをもとに、幼稚園において実施されているユニバーサルデザイン化された支援内容が、小中学校において実施されているユニバーサルデザイン化された支援内容との間にどのような関連があり、どのような系統性が想定されるかについて、その仮説を検討する。

なお、本稿の執筆においては、共同執筆者間にて協議、検討し、客観性、妥当性の担保に努めた。特にエピソードの記述においては匿名性を担保するような表記とした。その上で公表については関係者の許諾を得た。

## 3. 結果と考察

### (1) 附属幼稚園と附属小学校事例の対照

#### ○事例1. 附属幼稚園(4歳児)の一斉保育における共同注意の成立の促し

一般的に幼稚園では、自由保育と一斉保育がある。一斉保育の場面においては、必然として幼児が共通の課題あるいはテーマに注目することを要件とすることが多い。

さて、附属幼稚園の4歳児クラス（2学級、各20名定員）は、3歳児クラス（1学級、20名定員）と新入園児の混成によって再編成された2学級である。それぞれに異なる生活経験を有する幼児が、新たな集団にて幼稚園での生活を開始する。

4月半ば、自由保育のあとに、2学級がホールに集った。車座になり着席し教師が語りかけようとした場面でのことだった。

直前まで行っていた自由遊びの余韻か、ホールでの新規場面への期待なのか、いずれ幼児各々の思から、気分が高揚している数名の幼児の姿があり、車座になって一端は腰を下ろしたが、後からホールにきた他方のクラスの幼児が座るまでの間に隣の幼児に抱きついたり、たち歩き、駆け回ったりし始めた。それにつられるようにして、駆け回る幼児が増え、座っている幼児の中にも隣同士ではしゃぎ始める姿が見られ、あちこちから絶え間なく歓声があがった。中には着席を促す個別の声がけに耳を傾ける様子がないほどに高揚している幼児もいた。教師は、「みなさん、お話しします」と全体への呼びかけをしたが奏功し難いようであった。

そこで、教師が手拍子をし、幼児がそれに呼応し、手拍子を模倣することを促す遊びをはじめた。初回は、数名の幼児が応じた。数回の繰り返しによって、見る見るこれに応ずる幼児が増え、全員が着席し、手拍子が小気味よいほどに揃ってホールに響いた。

その後で教師は「お話をします」と幼児に語りかけ、一斉保育が開始した。

### ○事例2. 附属小学校3年生の国語の授業場面における共同注意の成立の促し

一般的に小学校では、児童の能動的な学習場面として、ペアワークにおいて児童同士が対話し意見の交流をすることがある。

さて、附属小学校3年生の国語の授業においてペアワークが開始された場面でのことだった。

教師の開始の指示によって、児童はそれぞれにペア同士で体を向けあって活発な対話を開始した。教室の中では、約30名の児童の声が響き渡っていた。教師は机間巡視をしながら、全体の進捗状況を確認した。その上で、教師は予定していた時間でこの活

動を区切り、一斉指導の形態に戻るよう全体への指示をした。

しかし、対話の盛り上がりによって、その指示が耳に入らない様子の児童や、対話を終えない周囲の様子を見回し、自らも対話の継続をする児童もおり、教師の指示は奏功しなかった。

そこで、教師は、ある音節の手拍子をした。児童はそれに即座に応じて、教師が示した音節に続く音節を手拍子で返した。同時に、児童全員の話し声はなくなり、体の向きを教師に向けた。

その後で教師は、ペアワークの成果を基にした全体での意見交流を開始した。

### ○小考察

幼児や児童が、活動の場で一時騒然となることは、学校の日常として、特に、発達段階によっては、十分あり得ることである。

事例1と事例2では、幼児児童それぞれが当該場面における欲求によって、結果的に一斉保育あるいは一斉指導場面において要される共同注意が不成立の状況になった。

ここでいう共同注意とは、教師と幼児児童あるいは幼児同士、児童同士が学習活動に向ける注意を共に向けることであるが、いずれの事例においても、教師は、これを聴覚情報の活用によって、共同注意の成立へと幼児児童を誘っていた。

しかも手拍子という、運動・感覚的な要素も加えていたことがそれぞれの年代には適合しやすかったのではないだろうか。幼稚園では、手拍子の模倣遊びによるものであり、当該場面への汎用が奏功した。小学校では、同じ手拍子であっても、特定のリズムうちとして定型化されたものであり、学級指導の内容としてとして定着したものであった。定着しやすさの一因には、聴覚情報としての手拍子を特定のリズムうちとしている点にもある。すなわち、他の聴覚情報との峻別がしやすい。つまりは、ざわつく教室の中にあっても、教師の手拍子は耳に入りやすくなっていると考えられる。しかし、この取組には管理的な印象ではなく、やはり、遊びの要素があった。

以上から、両者には、遊びから学びへの接続とい

う関係があり、ここに手拍子を用いた共同注意の成立における系統性を見出すことができる。

また、どの幼児児童にとっても取組みやすいということもユニバーサルデザインの性質であるといえる。聴覚情報への感受性が比して弱かったり、当該場面での反応が偶発的に遅れたりした幼児児童であっても、周囲の様子を参照したり、運動・感覚的な要素に着目したりして、活動の流れや取組みに追いつくことがしやすいためである。

## (2) 附属幼稚園と附属中学校事例の対照

### ○事例3. 附属幼稚園（5歳児）の昼食場面への活動移行のルーティン

一般的に幼稚園では、幼児が年齢相応に日常生活動作の獲得していく。それは、日々の生活によって培われるものであり、幼児自身がその発揮を望み、その発揮によってより確かなものとなる。5歳児クラスの2月ともなれば、円滑で頼もしく見えることも多い。

5歳児クラスの幼児がホールでの一斉保育を楽しんだ後に保育室に戻り昼食の準備を始めた場面のことである。

幼児は各々の手順やペースで動いていた。水場では手洗いのために列ができ、列の前後で談笑する幼児や几帳面に手をこすり合わせる幼児、ハンカチを園児服のポケットに押し込もうとする幼児がいた。

教室の一角に積み重ねられた折りたたみ式の机を対面した幼児同士がペアになり息を合わせて持ち上げ、運搬を始めた。すぐに次のペアが続き、食卓として所定の位置に配置した。

保育室のドア付近では、廊下の壁面からつり下げている鞆から弁当を持参する幼児の往来があった。

窓側に積み重ねられた椅子を持ち上げ、食卓に運ぼうとする幼児の往来もあった。幼児は互いの様子をうかがいながら、ぶつかることもなく活動をしている。教師は、全体に目を配り、滞りがないことを確認したり、配膳係の幼児と活動を共にしたりしていた。

そのような往来が収束し始めると、幼児各々が所定の座席やその周辺にて食卓周辺に弁当の袋を開けたり、配膳係の幼児がカップにお茶を注いでまわ

ったりしはじめた。その状況を見渡し、頃合いを判断した、教師は音楽プレーヤーで音楽を流し、手遊び歌を始めた。幼児はそれに応じて着席し、手遊び歌をはじめた。遅れていた数名の幼児もそれに気がつきそれぞれのペースで席に着き、参加した。全員が揃ったところで、食事場面への移行となった。

### ○事例4. 附属中学校（1年生）の英語の授業への活動移行のルーティン

一般的に中学校の英語の授業では、ヒアリングやオーラルコミュニケーションなどの重視がある。

附属中学校1年生の英語の授業における導入場面でのことだった。授業開始直前、業間の休み時間、生徒は、用を済ませたり談笑したりと思い思いに過ごしていた。そこへ、始業のチャイムよりも数分早く教師が教室に入り、音楽プレーヤーで英語の楽曲を流した。生徒は、それを聴きながら各々のペースや手順で授業の準備をはじめた。

小気味のよいテンポの楽曲であり、鼻歌交じりの生徒の姿も見えた。授業の準備が整い着席した生徒は、歌詞カードを見ながらこの楽曲を口ずさんだ。楽曲の終盤には、生徒全員が授業準備を終えて、着席をし、歌詞カードを見ながら歌っていた。楽曲が終わると始業のチャイムがなり、「Hello Everyone」と教師が生徒に語りかけ、生徒はそれに応え授業が開始された。

### ○小考察

幼児や児童が活動を切り替えていく場面、いわば移行場面における支援は、日常的なものである。それ故に、ここでの滞りやつまずきは、主たる活動に対する心持ちを左右することがある。

事例3と事例4では、いずれも準備活動から本活動への移行場面である。準備活動では、個別の行動になるためにそれに要する時間には個人差が生じる。本活動の導入時に、まだ準備ができていない幼児あるいは生徒がいた場合、本人の心持ちが乱れることもあるし、周囲の幼児あるいは生徒の心持ちが乱れることもあるだろう。

そして、両事例共に、聴覚情報として音楽を用いていた。この効用には5つあると考えられた。すなわち、①両事例ともに、準備完了までの時間的な見

通しが明確になったこと、②両事例ともに、ルーティンとして定着し、本活動への心理的なウォーミングアップになっていること、③事例3では、準備完了の幼児が、準備未完了の幼児を待つ時間を顕在化せずに済むこと、④事例4では、本活動たる英語の内容に即したウォーミングアップになっていること、⑤両事例共、持続的な聴覚情報の提供になっているために、聴覚情報によって状況を把握しにくい幼児あるいは生徒であっても注意を向けやすく、また周囲の幼児あるいは生徒の様子を見て状況に気がつきやすいこと、である。

両者は、同様の支援方法であるが、年齢的な差異は明かであった。すなわち、事例3においては、生活内容への移行、事例4では学習への移行が扱われる。各々の内容中における系統性である。教育内容に即した系統性があった。

#### 4. まとめ

本研究では、幼稚園において実施されているユニバーサルデザイン化された支援内容が、小中学校において実施されているユニバーサルデザイン化された支援内容との間にどのような関連があり、どのような系統性が想定されるかについて、その仮説を提起することを目的した。

以下では、事例内容についての総合的な考察として仮説を提起し、それに関しての幼稚園の実践における参照価値について指摘する。

##### (1) 聴覚情報を活用したユニバーサルデザイン化された支援における要点

本研究では、聴覚情報を活用したユニバーサルデザイン化された支援方法の事例を挙げ、対照の上それらの系統性を考察し仮説を得た。その中で、次の3つが要点として挙げられよう。すなわち、①聴覚情報は、言語的要素よりも運動、感覚的な要素を伴うことが有効であった。これは、リズムや音楽が、それに対応する運動あるいはルーティンとしての活動を促しやすいためであろう。

②ルーティン化され定着するほどに有効化するのではないか。これは、特定の聴覚情報に対する峻別が洗練され、感受性が高まるためであろう。

③幼稚園、小中学校それぞれにおける聴覚情報の内容は、それぞれは年齢相応、発達段階相応の内容や形式であった。これは、至極当然のことであり、一般的にも教師の言葉遣い（用いる語彙、表現、速度やイントネーションなど）も幼稚園と小中学校それぞれにおいて異なる。事例においては、幼稚園では手遊び歌であったが、中学校ではアップテンポの洋楽のBGMであった。また、幼稚園では手拍子の反復であったが、小学校では特定のリズムに連なる手拍子の想起と実施であった。

##### (2) 幼稚園の実践における参照価値

本研究で取り上げた事例はいずれも、幼稚園、小学校、中学校それぞれの場で独自に開発、実施されているものであった。それにもかかわらず、両者において関連や系統性を見出せるのはなぜなのだろうか。

おそらく、幼稚園、小学校、中学校それぞれの場において実施される、幼児児童生徒の発達段階に即した対応の必然的結果なのであろう。

一方で、それらは見かけ上、幼稚園、小学校、中学校それぞれの場において「点在」しているわけだが、相互の接続によって「線化」することが「切れ目のない支援」の実現であり本研究の趣旨であった。

そもそも、幼稚園、小学校、中学校それぞれの場において教師は、幼児児童生徒の発達段階を的確に把握し対応する専門的力量と実践的蓄積を有している。これに、幼児児童生徒自身の経験的蓄積の理解を加えることによって、それを根拠としたより確かな支援を開発、実施できるようになるだろう。そこに、幼稚園における実践の参照価値がある。

ここでは、次の3つが具体的な要点として考えられるだろう。すなわち、①どのようなユニバーサルデザイン化された支援がなされ、それを幼児が経験してきたのか。

②ユニバーサルデザイン化された支援に対して個々の幼児がどのように応じてきたか、すなわち、それによって円滑に活動していたのか、二次的支援というべき個別の支援を要したのか。

③二次的支援を要した場合、その幼児に対してどのような支援内容を要したのか。

### (3) 今後の課題

冒頭に記したようにユニバーサルデザイン化された支援とは「傘概念」である。それゆえ、効果の有効性を示すことは、個別の支援方法の有効性を示すことの蓄積にゆだねられるだろう。

また、ユニバーサルデザイン化された支援が、幼稚園、小学校、中学校それぞれの場において、系統的に実施されるとしたら、その様相を把握するためには事例を縦断的に追跡する必要があるだろう。

今後は、ユニバーサルデザイン化された支援方法のレパートリーを収集するとともに、事例研究が必要であろう。

### 注釈

そもそも教育の場は、聴覚情報、端的には教師の声がけが主たる伝達方法である。当然、これは、言うまでもなくいつも万全とも限らない。その不足点を視覚情報の活用によって補う実践的対応は、特別支援教育の分野において、自閉症に対する近代的な理解と支援の哲学と方法をもたらした「TEACCHプログラム」<sup>17) 18) 19)</sup>の影響が大きいといえよう。

当然ながら、視覚情報の有用性を主張することは、聴覚情報の使用や有用性を否定するものではない。近年、認知特性をアセスメントする心理検査の発展と普及によって視覚情報、聴覚情報の有用性は、一人一人の子どもたちの認知の特性との適合、不適合によって指摘され、その考えに基づく実践が推奨されるようになった<sup>20) 21) 22)</sup>。つまり、視覚情報の理解が有意である子どもには、視覚情報を用いること、聴覚情報の理解が優位である子どもには聴覚情報を用いることがそれぞれ有用であろうと考えられている。

なお、視覚情報、聴覚情報がそれぞれ優位である子どもに対して、その特性と不適合である聴覚情報、視覚情報をそれぞれ提供した場合に「その情報内容を全く理解できないか」というと必ずしもそうではない。円滑には理解しにくい、理解することに過剰な労力を要するといえることが多いと考え

るのが現実的である。

### 謝辞

本研究は、新たな知見の発見や提供であるとともに、伝統的かつ日常的な教育における価値の再発見や評価を願うものでもありました。

本研究にご理解ご協力をくださった皆様に感謝申し上げます。

### 文献

- 1) 佐々木全・滝吉美知香・我妻則明・名古屋恒彦・最上一郎・塚野弘明・下山恵・紀修・柏木廣喜・遠藤寿明・高橋文子・小川恵美子・高室敬・山本一美・山崎健・藤井雅文・菊池明子・佐々木弥生・熊谷佳展(2016)：附属4校園及び教育委員会との協働によるユニバーサルデザイン授業の普及啓発事業—その到達点と今後の方向性—。岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業 教育実践研究論文集, 3, 109–114.
- 2) 佐々木全 (2015)：大学から地域へ！ユニバーサルデザイン授業の発信。実践障害児教育、43 (4), 22–23.
- 3) 岩手大学教育学部 (2014)：岩手大学教育学部附属学校ユニバーサルデザイン授業実践事例集。http://www.edu.iwate-u.ac.jp (2017.5. 15. 閲覧)。
- 4) 岩手大学教育学部 (2016)：岩手大学教育学部附属学校ユニバーサルデザイン授業実践事例集増補版。http://www.edu.iwate-u.ac.jp (2017.5. 15. 閲覧)。
- 5) 佐藤慎二(2014)：実践通常学級ユニバーサルデザインⅠ。東洋館出版。
- 6) 佐藤慎二(2015)：実践通常学級ユニバーサルデザインⅡ。東洋館出版。
- 7) 小貫悟・桂聖(2014)：授業のユニバーサルデザイン入門 どの子どもも楽しく「わかる・できる」授業の作り方。東洋館出版社。
- 8) 日本授業UD学会(2018)：日本授業UD学会

について.<http://www.udjapan.org/> (2018. 2.

9. 閲覧).

- 9) 文部科学省 (2008) : 幼稚園教育要領.
- 10) 下山恵 (2017) : 保育の基本はユニバーサルデザイン. 特別支援教育研究, 714, 13 - 15.
- 11) 文部科学省(2017) : 幼稚園教育要領.
- 12) 文部科学省 (2016) : 次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて (報告), <http://www.mext.go.jp> (2017. 5. 15. 閲覧).
- 13) 厚生労働省(2016) : 今後の障害児支援のあり方について (報告書), <http://www.mhlw.go.jp> (2017. 5. 15. 閲覧).
- 14) 佐々木全・池田泰子・下山恵・千葉紅子・高橋文子・渡邊奈穂子・石川幸子・北條早織・小川恵美子(2017) : ユニバーサルデザイン化された支援内容の系統性についての探究—幼稚園における支援内容と小中学校における支援内容との縦断的関連—. 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集, 4, 50—55.
- 15) 前掲4)
- 16) 鯨岡峻 (2005) : エピソード記述入門 実践と質的研究のために. 東京大学出版社.
- 17) 佐々木正美 (1993) : 講座 自閉症療育ハンドブック—TEACCHプログラマー—. 学研.
- 18) 内山登紀夫 (2006) : 本当のTEACCH—自分が自分であるために—. 学研.
- 19) 佐々木正美・宮原一郎 (2004) : 自閉症児のための絵で見る構造化. 学研.
- 20) 上野一彦・海津亜希子・服部美佳子(2005) : 軽度発達障害の心理アセスメント WISC-IIIの上手な利用と事例. 日本文化科学社.
- 21) 藤田和弘・青山真二・熊谷恵子(1998) : 長所活用型指導で子どもが変わる 認知処理様式を生かす国語・算数・作業学習の指導方略. 図書文化.
- 22) 尾崎洋一郎・草野和子・中村敦・池田英俊 (2000) : 学習障害 (LD) 及びその周辺の子どもたち—特性に対する対応を考える—. 同成社.